

『水虎様への旅—津軽の水士文化』

広瀬伸著
津軽書房刊

本書の特色は、河童神・水虎様を題材に、農業土木の技術者が著したという点にある。

水虎様は明治初期、青森県つがる市実相寺の住職が水難防止に始めた河童信仰で、昭和九年（一九三四）折口信夫が神像を模造して國學院に持ち帰ったことから、広く知られるようになった。

著者は平成八年（一九九六）農水省から青森県に出向し、水田の区画整理事業を担当したことからこの信仰に注目した。京都大学農学部で農業工学を学び、さらに文学部史学科で人文地理学を修めた学識をもとに、小祠をつぶさに調査、文献を集めて分析を試みた。

農業土木を（実）の世界とし、水虎信仰を（虚）の世界として重ねあわせた考察は斬新である。両者を「水士文化」として捉え、自ら「水士文化研究家」を名乗る。

I 魅せられて

まず、菅江真澄、古川古松軒、工藤白龍、平尾魯仙、柳田國男、洪澤敬三、折口信夫、太宰治

池田彌三郎、中道等、小井川潤次郎、能田多代子、森山泰太郎、三浦貞栄治、小井田幸哉など、青森における河童研究や関心の跡をたどる。

II メドツ伝説

河童を見たという人々がいる。その証言もとに青森における河童のイメージを復元し、昔話や伝説などの伝承を、「文使い」「恩返し」「葉と骨接ぎ」「河童の宝物」「蛇と河童」など、モチーフに分けて分析している。

III 津軽の河童—水虎様への旅

カッパ、メドツ、ミズガミサマなどと呼ばれる神の系譜をたどり、その信仰形態からカミサマ（民間宗教者）との関係を描き出し、水虎様の神像を河童型、女神型、石版刻字型に分類し、その由来や成立年代を検証している。

（実）の世界として、弘前藩の新田開発を挙げる。著者の専門である水路網は稲の稔りをもたらした半面、幼児の水死事故を招いた。水虎信仰を、幼いわが子を水難で亡くした親の思いが生み出した流行神の一つと見る。

（虚）の世界である信仰の土壌や魂のゆくえに心を通わせ、地蔵信仰や水虎信仰を生み出した地域構造からその要因を探る。

「中心となるのは河童（伝説）と水死事故で、その間を媒介するのがカミサマである」とし、

そして、これらを「悲哀を緩やかに癒やす回路」として捉える。

IV 水虎様の水士文化

「津軽の水虎様を成り立たせたものとして、「実」の世界（物質的基礎）には北国の厳しい稲作農業とその舞台があり、「虚」の世界（精神的基盤）には、過酷な生産と生活を巡る人々の想いがあつた」と推察する。

杭止神社や堰神社の人柱伝承や鬼神社の逆堰伝説を挙げ、「さまざまな伝説伝承は人々が水に対してどんな想いを託してきたかを浮かび上がらせる」と。農業水利は技術だけが云々されがちだが、人的要素、精神的要素に関わる。農業水利は伝説を生み出す場であり伝説は施設を維持し、利害を調整していく教育やコミュニケーションの場となってきたことが屢々見られる、と説く。

「遊び場や水棲生態系の観察空間に改築された水路は、確かに現代のニーズに即している。（略）現物を前にすれば、伝承の持つ記憶・教育装置の機能は圧倒的である」とし、つがる市の例を挙げてアイデンティティを有する（本物の場所づくり）を提案している。

一九九九年の参考文献からは、著者の博識と探究心が窺われる。（佐々木達司）

（二〇一七年一月／本体二〇〇〇円）

『世礼国男と沖繩学の時代』
琉球古典の探求者たち末次智著
森話社刊

本書は、一九三二年頃から沖繩の地で活動を開始した新おもしろ学派といわれる世礼国男や島袋全発、比嘉盛章、宮城真治の研究、および世礼に影響を受けてオモロ研究を始めた小野重朗の研究を論じた書である。本書の目次は、「I世礼国男の仕事／I人生と研究の軌跡、2『おもしろさうし』研究、3身体音楽譜、4幻の詩集『阿旦のかげ』」を求めて、II新おもしろ学派とその周辺／1島袋全発と比嘉盛章、2伊波普猷と新おもしろ学派、3宮城真治と新おもしろ学派、4小野重朗の分離解説法、III資料／1宮城真治草稿翻刻、2世礼国男関係年譜、3世礼国男著作「一覧」である。

目次から知れるように、本書の中心は世礼国男にかかわる研究である。沖繩戦により戦前の新聞や雑誌の多くが失われた中で、著者は資料を探索し詳細な「関係年譜」と「著作一覧」を作り、世礼の「人生と研究の軌跡」を描いている。世礼は、『音楽譜土工四』上・中・下巻続巻（一九三五～一九四一年）を野村流音楽協

会から世に出し、琉球歌謡の勝れた研究「琉球音楽歌謡史論」（一九四〇年）を琉球新報に連載した研究者であるが、その出発は一九二二年に曙光詩社から『阿旦のかげ』を世に出した詩人であった。著者は詩集に収められている「琉歌訳」（琉歌の現代詩への翻案）が、琉歌の歌謡性を探求したもので、琉歌を現代詩にする時に「手放さざるをえない」問題に直面したと考えている。それ故に、世礼は創作から「まだ生き生きとしていた自己の文化」の研究に向かったのだと記している。その成果が『音楽譜土工四』であるということだが、その書は三線の旋律を示す土工四に「身体的な動作の指示」を含む声楽譜を重ねたものである。著者は、世礼がこだわった歌謡性（自己の文化）に焦点をあてて『音楽譜土工四』を位置付け、次の研究「琉球音楽歌謡史論」を生むという見取り図を示した。これは、重要な指摘である。著者は世礼に流れる歌謡性に焦点をあてて、詩人から出発した世礼が琉球の音楽研究・歌謡研究において飛び抜けて勝れた業績を残した世礼国男論を提示したのである。

著者が世礼と並んでとりあげたのは、宮城真治のオモロ研究である。著者が述べているように、草稿のままであった宮城の『おもしろ

さうし』の読法「転読法の研究」に対する卓見は、新おもしろ学派の水準を示す勝れた研究である。新おもしろ学派という一般的なグループの中心にあり、「おもしろさうし」の読方―転読法の研究―（沖繩教育一九三三年）を書いた島袋全発が有名であるが、宮城は島袋の転読法を正確にたどった草稿を書いていた。著者は草稿を名護博物館に所蔵されていた「宮城真治資料」から発掘し、本書でそれを正確に位置付け翻刻している。貴重な仕事である。

本書はオモロ研究を主軸に展開される琉球歌謡研究において、重要な業績を残した世礼国男や宮城真治等の具体的な仕事にふれて、第三期（大正末期から沖繩戦が終結するまで）に分類される沖繩学の問題として捉えようとしている。郷土沖繩を出ることなく沖繩で生を終えた世礼や宮城等が、自己の文化にアイデンティティを見だしそれを知的に対象化して勝れた業績を残しながら、最終的には日本のナショナルリズムの中に収斂していった、その問題を考えようとしている。伊波普猷の沖繩学の検討とともに、伊波を支え、あるいは対抗しようとした沖繩学者達の研究も、まさにこれからの大きな課題となる。

（二〇一七年三月／本体五八〇〇円）
（島村幸一）

『唄者 築地俊造自伝…楽しき哉、島唄人生』

築地俊造・梁川英俊（聞き手・構成）著
南方新社刊

奄美初の「民謡日本一（日本民謡大賞受賞者）」築地俊造氏は、一九三四年大島笠利町生、二〇一七年四月十四日八十二歳で死去。直前までステージに立った。本書はその三ヶ月後に刊行された話題作で、生前の聞き取りを中心にCDや座談記事を配し、奄美島唄の変動の四十年を物語る貴重な証言となっている。

築地氏は島唄の改革者といえよう。絹のようにしなやかな美声と持ち前の才気で、ステージで流通する上着の「シマ（集落）唄」から、広く島外の人々の琴線にもふれる「島唄」への変遷を主導した。いわば島唄の「近代」を作り上げ、乗り越え、現代に至らしめた立役者の一人である。素顔の築地氏は朴訥な内にも深い知性を秘め、島唄一筋の真摯なお人柄。ステージでのユーモアたっぷりのトークは定評がある。本書は彼の語り口を生かし平易な記述である。

第一二章は「島唄人生の始まり」「民謡日本一へ」。山中の一軒家のような環境で、父や兄の唄

を聴いて育つ。ランプの灯りの下、唄遊びが盛んにおこなわれたが、父は息子が三線にさわるのを嫌った。山の畑で母が作業する傍らで、アオバトの鳴き声を真似していると、母に「本物よりも上手い」と誉められ夢中で練習に励む。それで裏声が鍛えられ、思春期の声が変わりは特になかったという。中学から名瀬で下宿、その家にあつた三線を手にとり、親恋しさに涙を流してうたった。

本格的に島唄を始めたのは三十歳を過ぎてから。大島の中心地名瀬で各地の唄者と交流。一九七五年に「新人大会」で優勝したが島唄キャリアの始まりである。この時出会った坪山豊氏に師事する。坪山氏に惹かれた理由は「何をうたつても即、坪山流になってしまふ」ところ。これなら自分の唄に作り変える余地がなく、三線の手やリズムが少し狂ってもサマにならず、コピーに徹するしかない。坪山氏からは「真似はするな、自分の唄をうたいなさい」と常にいわれた。二人の合作ともいえる《マンコイ節》で、一九七九年「日本民謡大賞」を受賞。この時「日本一」はなれても島一にはなれない」と語つたのは有名である。自分の唄は生まれじまの唄というよりはむしろ、名瀬の町の雑踏の中でつちかわれた「島唄」「奄美民謡」なのだ、

との思いがある。シマ唄の本流、本来の伝統からははずれる、という意識なのだ。

第三四章では、大賞受賞後に、日本各地のみならず欧米に広く招かれてうたった時のエピソードが綴られる。第五・六・七章は、島唄が生活とともにあつた時代、実演家からみた唄者、曲の背景など示唆に富む内容だ。

第八章「これからの島唄」では、奄美島唄の課題と展望を語る。近年若い人が上手くなり技巧に走る一方、唄遊びで培う言葉あそびや言葉豊かな感情表現等が失われている。また教室中心の系列化された唄になり、個性的な「自分の唄」をうたう人が少ない。では島唄本来の「心のこもつた、魂の唄」になるには。それは「生きていく島唄」、すなわち今の自分の生活・感情をうたうことだ。「伝統とは革新である」「古典でありながら同時に現在のものでなくてはならない」との信念から《交通安全の唄》《地震・原発の唄》等々を創作。またロックや津軽三味線等とのコラボ、腹話術で人形と唄掛け（これは子供たちに親近感を持たすためだという）、一人三役（唄・三線・太鼓）など次々と新しいことに挑戦。島唄ファンを魅了し続け、「つねに全体を俯瞰しながら、自分の立ち位置を把握している稀有な唄者」（梁川）であつた。（酒井正子）

二〇一七年七月／本体二五〇〇円

『琉球文学論』

島尾敏雄著
幻戯書房刊

本書は、島尾敏雄が一九七六年に多摩美術大学で行った集中講義をもとにしたものであるという。本書は、第一章「なぜ、琉球文学か」その背景の琉球弧について」、第二章「琉球語について」、第三章「琉球文学の歌謡性」、第四章「歌謡と占謡の区分」、第五章「琉球弧の歴史」、第六章「オモロ」、第七章「琉歌」、第八章「琉球の劇文学」の八章からなる。琉球文学の具体的な解説は、後半の第六章から第八章で、受講者に時にはユーモアを交えて分かりやすく講義しており、島尾の人柄の一面が窺える。

島尾が特に力を入れて比較的丁寧に解説をしているのは、第八章である。組踊「執心鐘入」を全編にわたり取り上げている。第八章はさらには、沖永良部島知名町に伝わる上平川の蛇踊りにも及んでいる。上平川の蛇踊りは、島尾が述べるように「執心鐘入」が地方に伝播した芸能であろう。しかもこれが、島津藩の支配地域だった沖永良部島に伝わっていることは、注目される。この伝播が明治以前であるならば、当

時組踊が一般には上演されない芸能であること考えると、首里や那覇で組踊を見た沖永良部島の役人が島に伝えたということになる。これは、島津侵攻以降、与論島以北が島津の直轄地となりながらも、なお沖永良部島（与論島もそうだろう）と沖繩本島には直接的な交流が続いていた証しになる。島尾の解説が、オモロや琉歌については意外に奄美との関連に多く触れていないのに比べ（例えば、琉歌ならば、シマウタとの関係性がいくらでもいえると思われるが）、組踊については上平川の蛇踊りまでに及んで解説していることは注目される。これは、島尾が沖繩芝居の熱心なファンであり、芸能に対する関心が強かったということか。いずれにしても、講義が行われた一九七六年以前にあつては、琉球文学の概説的な研究書は乏しく、島尾は琉球文学の概要を掴むのに苦労したと思われる。ただ幸いなことに、その年に外間守善編『鑑賞日本古典文学 南島文学』角川書店と池宮正治『琉球文学論』沖繩タイムスが出版されている。本書には外間の名が時々であるが、島尾は刊行されたばかりの著書に大いに学んだと思われる。その中で、本書の第三章では琉球文学の特徴を的確に捉え、第四章では外間のジャンル区分に自身の見解を新たに加えており、島尾

の勤勉な研究振りが窺える。

しかし、本書で注目されるのは、やはりヤポネシア論を提示した島尾が、奄美を視点として琉球文学をどう描いているか、日本文学に対して琉球文学をどう位置付けているかということだろう。島尾のヤポネシア論は早く、ヤポネシア、琉球弧という語がみえないものの、『おきなわ』第四十号、一九五四年（おきなわ社）に「沖繩」の意味するもの」を書いている。これは、島尾夫妻が名瀬に移住する以前に書かれている。ヤポネシア論の原型は、島尾が震洋特攻隊長として加計呂麻島に赴任していた頃から考え始めていたのではないか。それはともかく、自身が東北の出身であることをまじえて、第一章で琉球文学の背景としての琉球弧について、第二章、第五章では琉球弧の言語と歴史について語っている。ただ、それが十分に琉球文学の「意味するもの」を語り切っていないように感じられる。その点が、悔やまれる。しかし、この問題は島尾といえども琉球文学の「意味するもの」を感覚的な言葉で語ることは出来ても、実証的に体系に説明することは難しいとも思われる。それは、今後の琉球文学の個別的な研究の積み重ねの中で見えてくるのか。（島村幸一）

『しまくとぅばルネサンス』

(沖繩国際大学公開講座26)

沖繩国際大学公開講座委員会編

沖繩国際大学公開講座委員会発行

本書は、沖繩国際大学定例講座「しまくとぅばルネサンス」における各研究者の講座内容をまとめたものである。そして、琉球方言圏のこぼである「しまくとぅば」の価値を再確認するために、多角的・多面的な観点による研究によって「しまくとぅば」を複合的、総合的に捉え直し、その価値を改めて共有しようとするものである。現在、存在が危機的な状況にある伝統的な「しまくとぅば」の言語的、文化的価値を再興しようとする点において、タイトルの

「ルネサンス」は強烈かつ的確なことばであると言えよう。言語資料の蒐集、記録、保存、継承が叫ばれて久しい琉球方言・琉球文化に関する研究者の、「しまくとぅば」に対する強い思いが満ちた内容となっている。

本書で取り上げる「しまくとぅば」は非常に多彩である。「おもろさうし」や碑文、各地域に残る歌謡といった口承文化や文字による表記の変遷をはじめとして、文学作品における「しまくとぅば」の役割、台湾や香港を比較対象に、

言語教育や学校教育として「しまくとぅば」を扱う可能性や課題が具体的に挙げられている。また、「しまくとぅば」の実態や各地域での保存・継承のための取り組みなどについても分析考察されている。一方、「うちなーやまとうぐち」のような、伝統的な琉球方言を母語に持たない、若い世代の「しまくとぅば」的言語の実態も報告されている。「しまくとぅば」と呼ばれることは、老年層だけのものではなく、若い世代にも姿を変えながら継承されている。老年層のことは注目されるなか、若い世代の使用することばにも「うちなーんちゅ(沖繩人)」としてのアイデンティティが担われている点是非常に興味深く、今後の変化を継続的に研究していく必要性を示すものとなっている。

本書には、通時的かつ共時的「しまくとぅば」が網羅されていると言っても過言ではない。言語の消失という危機に直面している琉球方言圏において、「しまくとぅば」を研究するための指針が示されており、「しまくとぅば」研究に取り組み上での入門書と呼ぶべき内容となっている。また、「しまくとぅば」という語から少なからず連想される、「老年層の話すことば」というイメージを払拭し、「しまくとぅば」研究の対象が幅広いものであり、かつ今後も継続

されていく意義を再認識させる。そして、「しまくとぅば」が連続と継承してきた「うちなーんちゅ」としてのアイデンティティを再考するとともに、「しまくとぅば」を「うちなーんちゅ」としての視点だけでなく、客観的な視点・観点から捉え続けていくことの重要性も示されている。さらに、「しまくとぅば」が研究者や老年層だけのものではなく、沖縄、日本、世界全域の財産として共有されることで、その文化的価値を高め、消失に歯止めを掛けながら、新たな文化が形成されていく実態を捉えていく。「しまくとぅば」研究は尽きることがないことを改めて実感する。

最後に、これからの琉球方言研究へのことばとして、本書の一節を紹介して本評を閉じたい。「琉球方言の研究、そして記録・保存には、うしなわれていくものに対する感傷的な感情からでてくるのではない、普遍的で、かつ多様な意義がある。琉球方言が消滅の危機に瀕しているとすれば、将来に悔いをのこさないために、手遅れにならないように何をしなければならないのか真剣にかんがえなければならぬ。私たちは、文化の消失が人類の共有する財産の消失となることを自覚し、継承・保存のためにできることを発信し続けていかなければならない。(座安浩史)

(二〇一七年三月／本体一五〇〇円)

『被差別の民俗学』

折口信夫著

河出書房新社刊

折口信夫の学問は、「まれば」とを学説の宇宙の中心に据えることによって生成されていった。日本文学の発生と芸能の組織を「まれば」という理念型を創出することによって、折口の学説は大きく体系化されたといえる。しかしながら「まれば」とはあくまでも理念型であって、実態的な概念ではない。そこで用意されたのが「ほかび」という概念である。「ほかび」とは「乞食者」と表記される万葉語であるが、折口は、寿詞を唱え祝福をして諸国を遍歴漂泊した宗教者・芸能者集団を指す語彙としてこの語を用いた。こうした集団こそ歴史上に現れた紛れもない「まれば」との姿であり、過去の日本にはこのような「ほかび」との文化が底流に流れ続けていたのである。

本書はこの「ほかび」とに関連する論考を『折口信夫全集』の中から選び、三章仕立てにして編集したものである。

「Ⅰ 語り部と漂泊芸能」では、せきぎ節季候・鹿島のことぶれ・たたきや小正月のなみはげたか・なまはげ等を取り上げた「初春のまれば

と」、「万葉集」の「乞食者詠」の解釈から入り、神霊を収めた行器を持って漂泊布教した宗教者・芸能者について論じた「巡遊伶人の生活」、千秋万歳と曲舞、田舞と田楽、海・川を主として活動した「くぐつ」、唱門師、熊野の唱導と念仏芸、説経から浄瑠璃へと、唱導文学と芸能の展開を追究した「賤民の文学」、そして最後に、説経浄瑠璃から歌舞伎・文楽の台本として脚本化された信太妻伝説の発生を、四天王寺か住吉の神宮寺の寺奴であった安倍野童子の漂泊布教に求めた「信太妻の話」を収録する。

「Ⅱ 信仰と特殊芸能」では、八幡神の供神であった才の男や西宮の百太夫を例に、「社々の祭祀に出るお迎へ人形系統のだし人形は、祭りに臨む神を迎へて、服従を誓ふ精霊の形の変化であるが、此が逆に、祭祀に來臨する神其もの、形にもなる」とし、この神と精霊の交錯を、さらに虫送り人形、ひな人形、おしら様などにも及ぼして論じる「個人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」を収録する。「木屋の地屋のはなし」では、近江国君ヶ畑・蛭谷や美濃国米神の採集談から、惟喬親王を祭神として諸国を歩いて轆轤を回した木地師の生活と語る。他に「鬼と山人」「巫女と遊女」の小編を収める。「Ⅲ ふるさとと海山のあいだ」

では、折口自身、差別される人々にどのような視線を注いでいたのか、「毎月帖 九月二日、三日、四日」「零時日記(Ⅱ)」「海道砂の二」の三編の日記を通して探っている。

ここまで内容紹介をしてきたが、気になったのは選集編纂の仕方である。「初春のまれば」と「巡遊伶人の生活」「賤民の文学」の三編は、「国文学の発生」第四稿・第二稿からの抜粋である。紙幅の関係もあろうが、論考全体の流れを欠いているので、読んでいても何とも中途半端な感じがする。その反対に「海道砂の二」は全文を選択しているが、もっと刈り込めると思う。さらに言うとう、「鬼と山人」はこの選集のテーマに合致しない。

本書のテーマに即した折口の著作なら、住吉の田楽座を舞台にして田楽法師の生活を描いた「身毒丸」、また自叙伝風の「口ぶえ」には、コレラ病流行のさい夜も寝ないで被差別部落の人々のために治療に当たった祖父の姿が描かれている。これは祖父造酒之介をモデルにしている。どちらも小説形式であるために採録されなかったのであろうか。巻末には安藤礼二執筆の「解説」が付されている。

(保坂達雄)

(二〇一七年六月／本体二四〇〇円)

『怪異伝承譚』

—やま・かわぬま・うみ・つなみ—

大島廣志編
アーツアンドクラフツ刊

山や海で暮らす人々にとつて、山や海、水辺の不思議な話は、伝承世界の話ではない。本書を読むと、日々の生活に密接し、実際にあった話として語り継いできたことを実感する。

本書は、やま(46話)、かわぬま(9話)、うみ(17話)、つなみ(9話)に分類され、それぞれの怪異譚が収録されている。末尾には、編者の解説が付けられている。使用した資料は、口承文芸黎明期の資料や編者が運営委員を務める民話と文学の会が刊行した資料集など、幅広い。口頭伝承資料集に精通している編者だからこそ、出来た仕事であろう。

山、河沼、海は自然であるが、津波は自然災害である。編者は、津波の話を「記憶しておきたい話として提示した」(解説)と述べる。津波の話も、自然と人間との関わりの中で取り上げるべきだと考えていることがわかる。自然は人間に恵みをもたらす一方で、災いを引き起こす脅威でもある。それを思い出させるのは、語りである。本書は、語りの重要性を考えさせられる書でもある。

(関根綾子)
二〇一七年十月／本体一八〇〇円

『ロシア歌物語ひろい読み』

英雄叙事詩 歴史歌謡 道化歌』

熊野谷葉子著
慶應義塾大学出版会刊

ロシアが昔話や民謡の宝庫であることは日本でも知られているが、叙事詩やバラードが一九世紀から二〇世紀にかけて何千の単位で記録され、ロシア人の誇りとなっていることはあまり知られていない、と著者は語る。本書では、そのうち特に珍重される英雄叙事詩「ヴィリーナ」を中心に、歴史歌謡、道化歌からも数編が紹介されている。

どのような形式で叙事詩を紹介するかに著者の挑戦が感じられる。幕開けを知らせるように短い詩文を並べて読者を物語世界へ誘い、菌切れの良い文章で物語を展開させる。幕が下りると短い解説が入り、幕間も楽しめるといふ仕掛けである。それにも関わらず、著者の「活字ではすべてを伝えきれない」という焦燥が全体から漂う。生きた伝承を如何に残すか、著者の長年のテーマとも重なる。なお、ピリーピンやヴァスマツォフの絵画が豊富に見られるのも本書の魅力である。伝承文化への関心が、ロシアにどれ程の実りをもたらしたのかを感じる、ことが出来るだろう。

(松村裕子)
二〇一七年三月／本体七〇〇円

『こゑのことばの現在』

口承文芸の歩みと展望』

日本口承文芸学会編
三弥井書店刊

日本口承文芸学会創立四〇周年の節目に、口承文芸の現在を捉え、その先の研究を見据える目的で本書が編まれた。はしがきのなかで花部氏は「庶民生活においてどのような役割を果たし、どのような社会的機能のもとに成立しているかについて、不断に追究していかなければならない」とともに、「口承文芸の現代的な特性は国際比較にあるといつてよい」とも述べる。取められた論考と事項は、花部氏の指摘に呼応して多岐にわたる。ネット上での声なき口承や、教育基本法が改正されるものになったことに対してどう考えるか、災害と伝承、現在も歌い継がれる歌、昔話の国際比較等々。各研究が同じ地平に立つて未来を見据えられるだろう。花部氏は「学会は、孤立した状態の人や研究を結びつけていくのが役割である」とも述べる。過去に現在来、日常と世界のむこう、不断に縦横に広がるとうとする伝承世界を統合し未来へ繋ぐのが学会の役目との決意の表れであろう。

(松村裕子)
二〇一七年四月／本体二八〇〇円

『イタリア古代山岳王国悲歌』

増山曉子著
悠書館刊

イタリア北部オーストリアとの国境付近にドロミテ山地は位置している。ここに「ファネス王国」があったと伝えられている。イタリア人にもあまり知られていない伝承だそう。谷間に残る叙事詩や伝説の断片を、一九一三年にヴォルフが「ファネス王国の物語」にまとめた。ヴォルフ自身の想像も混じっているとの批判もあるが、今も参照されている書籍である。本書はヴォルフの書籍を中心に、研究書と著者本人のフィールドワークを基に、物語風に書き記したものである。ドロミテ山地にマルモッタという生物がいる。人間とマルモッタの姿を自由に入れ替えることが出来た女性と、人間の王がこの地にファネス王国を築いた。人間とマルモッタの同盟による平和な統治は、やがて余所者の王が鷹と同盟関係を結んだことから危うくなる。その後、話は人間の冒険譚へと展開する。ヨーロッパ各地に残る異類婚姻譚を彷彿とさせる伝説の一つであり、アーサー王物語の源流とも言われる。

(杓村裕子)

(二〇一七年六月／本体二五〇〇円)

『グリム童話と表彰文化 モティーフ・ジェンダー・ステレオタイプ』

大野寿子編
勉誠出版刊

本書は、武庫川女子大学野口芳子教授退職記念論集として企画されたものである。しかし、書名にそのことは明記されていない。「この論集が研究成果という形で、共同研究者との絆の確認の場となり、新しい研究の息吹となればそれでいい」という野口教授の意向による。二十三名の研究者による論考で、海外からもハインツ・レレケやルース・B・ポテックハイマールらが寄稿している。

六章構成にプロローグとエピローグからなる本書は、「I. グリム童話を考える」、「II. グリム兄弟について考える」、「III. モティーフの変遷と展開を考える」、「IV. 社会的役割と家族のかたちを考える」、「V. 表象文化とその連続性を考える」とテーマも多岐にわたる。グリム童話にとどまらず、昔話、伝説、神話、現代伝説はもちろんで、演劇、映画といった表象文化、ジェンダー論などが扱われている。「VI. グリム研究者野口芳子について」では、野口ゼミの卒業生による野口教授の、実証実感の指導と温かいお人柄がうかがえる。

(久保華登)

(二〇一七年七月／本体四六〇〇円)

『性食考』

赤坂憲雄著
岩波書店刊

本書は、岩波書店のウェブページに「歴史と民俗のあいだ」と題され、数年にわたり掲載されていた内容を、加筆訂正順番も入れ替えて再構成したものの。新聞各紙のみならず、「クワワサン」等一般雑誌にも書評が載っており、ここに取り上げるまでもない話題の本。

異類婚姻譚をはじめとする昔話、ときに賢治童話や「アンパンマン」、SFまでを縦横無尽に駆け抜け、「食」と「性」の相似について思考をめぐらす。人間の野生を取り戻そうとするように。

伝承のなから人間や社会の深層を読み取ろうとする試みは、常に行われてきた。あるときは信仰と、またあるときは深層心理学やジェンダーの問題とも結びついて解釈されてきた。解釈の多様性は、直接口承の意義を映し出すものではないにしろ、隠された何かを予感させる要素が伝承に内在するために、伝承は受け継がれていくのではないかと思わせる。震災前に始まった連載が、震災の体験、震災後の変動を如何に変容したのかも興味深い。

(杓村裕子)

(二〇一七年七月／本体二七〇〇円)

『琉球の伝承文化を歩く4』

八重山・石垣島の伝説・昔話 (二)

登野城・大川・石垣・新川」

福田晃・山里純一・藤井佐美・石垣繁・石垣博孝編
三弥井書店刊

沖縄の伝説や昔話の記録には琉球王府時代の『球陽』やその外伝の『遺老説伝』、佐喜真興英による『南島説話』などがあるが、本格的な調査は本土復帰以降であった。しかし復帰後、沖縄は日まぐるしく変貌した。現在では昔話だけでなく、戦前の生活やしまくとぅばですら聴き取りが難しい状況になっている。

本書に収録された例話は主に昭和五十年・五十一年に立命館大学、大谷女子大学、沖縄国際大学が実施した合同調査において共通語で語られたものである。「稲の由来」や「牛馬祭の由来」のように人物名や地名が具体的にいきいきと語られた伝説、昔話は今では聴き取りの難しい貴重な伝承である。

また、一つ一つの例話の「伝承の窓」が素晴らした。関連する歴史書、類話、場所、行事、民俗事柄などが解説されており、例話の世界をより深く知ることができる。御嶽や祭りなどの写真、地図により、伝承の息づく石垣島四箇の風景と文化を感じられる。本書を手にも、石垣島を歩いてみたくなることだろう。

(幸喜邦恵)
二〇一七年九月／本体二〇〇〇円

『柳田国男・伝承の「発見」』

『落ち穂拾い』No.12 終刊号

田中宣一著
岩田書院刊

佐々木達司 編集・発行

文学に関心をもっていた柳田国男青年は、次第に伝承に興味をもち、椎葉村訪問をきっかけに人々の暮らしと暮らしを取り巻く伝承の連なりに関心を抱くようになっていた。その過程を、柳田の足跡や手紙等を手掛かりに丹念に解き明かす。それ即ち「伝承の発見」であった。菅江真澄の「発見」には、奥羽の羽柴雄輔の存在が大きかったこと、南海小記の旅を経て昔話が日本文化史研究に価値をもつものであると「発見」したことが丁寧な解説される。章は「桂女由来記」の使用文献「『鬼三太残齡記』への関心」「柳田国男と『諸国叢書』と統き、最後に「柳田国男と成城の町」というエッセイが収められている。武蔵野の色濃い成城で、柳田国男が気さくに近所の人々と交流していたさまが語られる。柳田国男の研究の深化には、人と出会いは、土地と土地に根付いた生活との直接的な出会いが必須であったことが浮かび上がってくる。伝承研究の基本姿勢を示す一冊である。

(椋村裕子)
二〇一七年九月／本体二六〇〇円

佐々木達司氏の個人誌『落ち穂拾い』が、終刊を迎えた。万感の思いで終刊号を拝読した。後書きにあたる「老いのたわごと」で、佐々木氏は八五歳を迎えられたことを書かれている。郷里・青森県を中心に、民間説話のみならず早物語やことわざ、謎々、方言、民俗文化を丹念に追いつけた佐々木氏が「集めた資料や書きかけの原稿は捨てるに惜しいし、活字にしておけば読んでくれる人がいるかもしれない」と始められたこの個人誌には、今は学術誌に載りづらくなった俗信や伝説、年中行事、艶笑譚等の資料報告や、小さな気づきを拾いあげた小品が多く、民俗学の初心を常に思い起こされらざるを得なかった。終刊号収載の「人名索引」に、氏のこれまでの先達への学恩や、話者への感謝、後進への期待を感じた。私たちは氏の思いを深く受け止め、繋いでいく義務がある。そう強く感じる。

(飯倉義之)
二〇一七年十月／非売品